

警察裏町の春よ早くこい

川 島 桓 夫



添付記事

1. 水害の町といわれた北川辺町のあらまし
2. 茫模たる渡良瀬遊水池
3. 田中正造翁の直訴状と直訴の状況
4. 嗚呼渡良瀬遊水池に沈んだ旧谷中村

警察裏町の春よ早くい

川島桓夫著



釣の大池は平成2年4月親水公園となる

著者略歴など

本名、川島英吉、大正十三年九月六日埼玉県北埼玉郡大利根町（旧原道村）に生れる。

高等小学校卒業後上京、徽章工場や飛行機製作所の工員をやりながら苦学する一方文学にも興味を持ち、加藤武雄氏、竹田敏彦氏、吉川英治氏の小説はよく読み感銘を受ける。

また創作にも意欲を燃やし、文芸講座で文章作法、小説作法を学ぶ。昭和十九年九月一日現役兵として入営、師団通信隊要員として中支に派遣される。その後中支、北支を転戦、終戦により昭和二十一年三月復員、佐世保に上陸し美しい祖国日本の素晴らしさを知った。

昭和二十二年九月利根川水害を体験、悲惨な水害被災者の窮情を見て以来治水の重要性を訴え続ける。同年十月埼玉県巡查を拝命、昭和四十三年三月巡查部長、昭和五十八年一月警部補、昭和五十九年三月定年退職現在に至る。

創作では「利根川の虹」「愛情という名の酒場」「白い花粉」「三国橋慕情」の四冊を出版している。

平成二年八月

定価 一、一〇〇円

著者 川島 桓夫

〒344 埼玉県春日部市一の割三九七

TEL 〇四八（七三五）三八〇一

印刷所 文明堂印刷株式会社

春日部市谷原一十七ー十三

TEL 〇四八（七六一）一七〇〇代

発行所 川島行政無料相談所

警察裏町の春よ早くこい

あらすじ

この物語りは、戦後の混乱期に吐血している上村朝子を救った、若い人情警察官栗田博と、朝子と同じ立派（逆縁）に泣いた山本明と、それらを取り巻く善良な人々が身に降りかかる悲しい運命を克服して、強く生きた物語りや、受けた恩を忘れず恩返しを続ける誠実な朝子夫婦の物語りでもある。

夫を太平洋戦争で失った関口もと子は義父から義弟次郎との逆縁を強いられるがその時、次郎には上村朝子という恋人がいたのだった。

もと子は自分が次郎と逆縁になれば幸せになれるが、それは朝子の恋を奪うことであり悩んだ。次郎は兄嫁と結婚式の前に朝子とかけ落ちを計画、家を出ようとしたその時、もと子は次郎が出て行くのを見ていながら心では幸せが逃げて行くかと思いがちながら声をせなかつた。

その直後、次郎は父に捕り家名を守ることの重大さを説得されるが、一方朝子は約束の場所に次郎が来ないので裏切られたと思い腹いせに家出するが、待っていたの

は混乱した冷たい社会で泳ぎきれなかつた。朝子は世を恨み男を恨んで自暴自棄の中で胸を犯されているところをパトロール勤務中の栗田巡査に保護され「自分自身を大切にして強く生きて下さい、きっと幸せがめぐってきます」と励まされた。

その時栗田は、体験から引取人のいない朝子は明日は警察から市役所へ引渡されすぐ釈放されるが、それを繰返しているうち二・三か月で死んでしまふと思い、自分が保護した以上言葉だけでなく、金をかけても朝子の病気を治してやろうと決意するのだった。

そして妻を説得、妻の結婚持参金を使って結核療養所に入れるのだったが朝子はその厚意に涙を流して喜び「誰もが出来ないことをしてくれる神様のような人だ、病気を治しきつと恩返しをしなくちゃ」と心に誓うのだった。

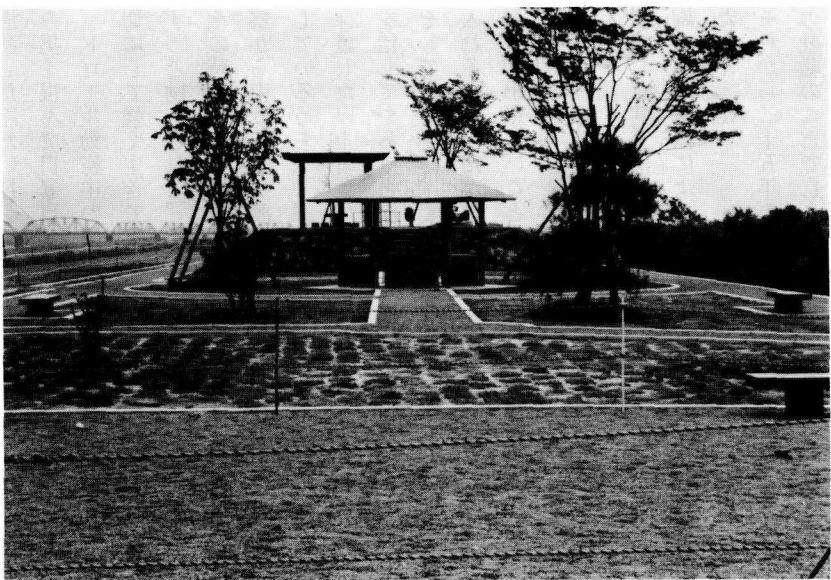
入療した朝子は病気を治そうとする強い意思と、栗田夫婦の温い愛情によってやがて病氣も治り社会復帰が出来たのだった。

それから二十五年の歳月が流れた。栗田房子は長男健一の就職のことで亡き夫の親友のところへ相談に行く途

中、東武伊勢崎線K駅の六番線ホームで上り電車を待つうち、立派な服装の五十年輩の婦人から言葉をかけられたが、その婦人こそ自分と亡き夫で食事を切りつめてまで救った上村朝子だったのである。

「あの節は救って下さって有難うございました。貴方の旦那様に言われたとおり、強く生きていれば必ず幸せがめぐってきます、それを信じて生きてきました。今は幸せです。元気です有難うございました」「お礼を言われる程のことではありません、でも幸せになれてよかった」房子は微笑して朝子の幸せを喜ぶのだった。

「奥さん旦那様はいまどちらの警察に勤務しているんですか？」問われて房子の顔はみるみる雲っていったが低い声で「十四年前に亡くなりました」「ええ、亡くなった、どうしてまた、なんで・・・」朝子は絶句した。涙があとからあとから頬を伝って落ちていった。栗田巡査は朝子を救って暫く経ってから巡査部長に昇任して一家に春が来たが、その春は永くは続かなかったのである。



大利根町の利根川決壊口跡公園

警察裏町の春よ早くこい 目次

一、警察官志願の息子	1
二、亡き夫の友人	3
三、情は人のためならず	5
四、敗戦の嵐	7
五、悲しい運命 きだめ	13
六、家名のために	16
七、いばらの道	20
八、転落の詩集	23
九、飲屋の女将	26
十、主食のブローカー	28
十一、療養所生活	38
十二、恩讐を乗り越えて	44
十三、母の心と子の心	54
十四、非情な刑事	59

十五、真の愛情には忘却はない	67
十六、相寄る二人	70
十七、復員してみれば	77
十八、過去の悪夢	85
十九、警察という社会	91
二十、父の恩人を尋ねて	114
二十一、再　　会	126
二十二、花は胸の中で生き続ける	133
○ 警察裏町の春よ早くこい　あとがき	142
○ 水害の町といわれた北川辺町のあらまし	155
○ 茫模たる渡良瀬遊水池（地）	161
○ 田中正造氏の直訴状と直訴の状況	163
○ 嗚呼、渡良瀬遊水池に沈んだ旧谷中村	166
○ 著者略歴など	181

小説

警察裏町の春よ早くこい

一、警察官志願の息子

「おかあさん、俺れ警察官になってもいいかい・・・」
「・・・」 「俺れ警察官の試験を受けようと思うんだ」
高校から帰宅した息子の健一から不意に言われた房子は
一瞬、胸がどきんとして返事が出来なかった。

房子は自分の狼狽を隠すように横を向いて心呼吸をす
ると、「健一、警察はなあ、世間の人からとても憎まれ
ているのよ、その上とても危険なのよ、悪い人に殺され
た者も大勢いるのよ、たえず危険がつきまとい、家族の
者だって来るまで心配なんだよ、お母さんはねえ、一人
息子のお前をそんな危険な職業にはつかせたくはないん
だ、もっと明るい職場で働いてもらいたいんだ・・・わ
たしは二人でこれからずっと平和に暮したいんだよ」

「・・・」

健一は母の気持がわからぬ訳ではなかった。幼稚園の
頃から高校三年になるまで女手ひとつで苦勞して自分を

育ててくれたからだだった。

だから一人息子を危険な警察官にさせたくない、平凡
でもいい月給とりにして平和な暮らしがしたいと願うのは
当然だと思った。

健一は県北部の不動様のある街の県立高校三年生だっ
た。進学組の多い中で健一は就職組だった。向学心に燃
えてはいたが父の居ない家庭なので進学を許さなかった、
だが健一はやる気さえあれば、独学でも大学の資格をと
れると就職を苦にしていなかった。

その矢先、少い就職組を狙って警察官募集に來たのが、
健一の高校を管轄するC警察署の警務係だった。募集に
來たのは若い警部補だった。彼の説明で健一が魅力を感じ
たのは格好いい新しい制服姿ではなく、入校すると一
年間給料を貰いながら好きな勉強が出来ることであつた。
その勉強もほとんどが法律で、憲法をはじめ刑法、刑
事訴訟法・行政法などで、これから永い人生には必要な
ものばかりであつた。

その上、健一がクラブ活動でやっている好きな剣道も
続けられることであつた。警察学校に入校すると護身の
為に、誰もが剣道か柔道のいずれかを選び卒業までには

初段をとらねばならなかった。それは強い警察官を作り職責を果たすためであった。

健一は今初段を持っていた。高校卒業の来年三月までには二段を取ろうと努力していた矢先警察官になれば努力次第で三段も夢ではないと思ったからだった。

健一には警察にはいる目的がもうひとつあった。それはいつかはわかってもらえるだろうが今は誰にも口にできないことだった。

健一は母に警察官志願を打ち開けるとすぐに反対された、それも烈しそ口調で、健一はおそろおそろ母の顔を見た。そこには何時もの優しさはなかった、目も吊りあがっていた。

健一はそれを見ると「やっぱり」と心の中でつぶやいて陰悪の空気を吹きとばすように「おかあさん俺、夕刊を配ってくる」と大声で言うとすぐ戸外に飛び出していた。

房子は健一が出て行ってくれたのでホットした。あれ以上健一に言われたらどう返答していいかわからなくなっていたからだった。

「お母さんその憎れ役を誰かがやらなければならぬ

んです、誰かがやらなければ日本の治安はどうなるんです、善良な市民は安心して夜は眠れなくなるんですよ」と言われたらどう返答したらいいか迷ってしまったろう、思わず口にしたきつい言葉、硬ばった顔を見せた自分、その取乱した姿を健一に見せてはづかしかった。

健一が出て行ってはっとしたが、薄いワンピースの下は汗びっしょりだった、暫く座り込んでいた房子は気を取り直すと立ち上って次の室に入っていた。

ふすまを開けるとそこは仏間兼寢室の六畳の室だった。そこには亡き夫の写真が飾ってあった。背広姿の整ったやや面長の三十代のありし日の栗田博の姿だった。

房子は写真をじっと見ていたが、仏壇のローソクに火を澄し線香をあげると両手を合せ生きている人に語りかけるように「貴方、今健一が警察官になりたいと言ってきたのよ、わたしは許すつもりはないけど、わたしに止められなかったら、貴方がやめさせるようにして下さいお願いします」房子はこの十四年間辛という日はなかった。

苦勞のしどおしだった。生きる希望は健一の成長だけだった。一人前に育てあげることだった。その希望があ

ったからこそ、貧乏も冷たい世間の眼にも堪えられたのだった。

老後は健一やその妻子と平和に仲よく暮したいのが房子の夢であり希望だった。その夢や希望が健一の警察官になることによって消えてしまうのであった。

健一を警察に入れて殺したくない、どんなことがあっても警察にはいることだけは阻止しなければならぬと思った。その時、房子の脳裏には十四年前の悪夢がよぎったが、「思い出したくはない、思い出したくはない」と首を二、三度横に振って打ち消した。

房子はまた亡き夫の顔を見上げる。すると風もないのに今まで一直線に立ちのぼっていた線香の煙が動き始め、ローソクの炎もそれにつれてゆれた。それを見ると房子は夫が了解してくれたのだと思った。

自分の気持が亡き夫の心に通じたのだと思うと房子はやっと笑顔を取りもどし「ああよかった、お父さんありがとう」といって房子はまた仏壇に手を合せ夫の冥福を祈るのだった。

二、亡き夫の友人

翌日の昼休み時間になると房子は自分が勤めている公務所を抜け出し近くの公衆電話から吉野勝夫に電話していた。

吉野は亡き夫の親友だった。夫が死んだ時、誰よりも夫の死に同情し非情な上司を罵ってくれたのだった。

夫の死後もノイローゼになりかかった房子を慰め励まし相談にものってくれた。夫の生前の親しい友が一人去り二人去って孤独になっても、時々訪づれては線香をあげ、安否を尋ねてくれたのは吉野一人だけだった。

人間は落ちぶれた時、他人の情がどんなに有難いものか、世の無情がどんなものであるか肌に感じたのもその時だった。

その後日本は経済が高度成長し、神武景気から岩戸景気は長く続いていた。その為房子の薄い給料袋もだんだん厚くなり、生活にゆとりができると吉野に相談することもなく、吉野の足はここ三年ばかり遠ざかっていたのだった。

吉野は房子の夫が死んだ直後、非情なそしてワマン

な内藤署長と激論をした直後、辞表をたたきつけて警察界を去っていった正義漢でもあった。

こうゆう立派な吉野を世間は放っておく筈がなかった。警察をやめて四か月後、県南のE市の市役所に迎えられた吉野は今では交通安全課長に出世し、思いやりのある良い課長さんで職員は勿論部外者からも親しまれていたのだった。

房子は健一に志を変えるよう説得してもらっているのは吉野が一番適任だと思った。亡き夫を頼みとはしているが、それは所詮、口をきく人ではなく、心の寄りどころ、気休めだけでそれだけでは安心できず、自分から行動を起こすことが一番だと考え、吉野を頼ることにしたのだった。

吉野は警察に十三年勤め、退職当時は房子の夫と同じ巡査部長だったが古参の部長だった。警察では巡査部長を初級幹部といってその頃は幹部会議にも出席できて、内部の事情にも精通していたし、とかく暗い面のある警察の特殊事情を話せば健一も心をひるがえすだろうと思ったからであった。

房子が電話すると丁度昼休みで在庁していた吉野はすぐ電話口に出た。「栗田さんですか暫くでした。急にま

たどうしたんですか？」「吉野さんまた助けて下さい。どうしても助けてもらいたいことが起きちゃったんです」「どんなこと、交通事故？」「そんなことじゃないのよ息子のことよ、健一が警察官になりたいと言いつ出したのよ、やめさせてもらいたいのよ」「ええーまたなんで警察官なんか……それによりによって」吉野は嘆息した。

「それがですねえ、健一の学校へ地元の警察署の人が警察官募集に来たらしいの、それで刺激を受けたらしいの……ねえお願い……」「困ったなあ、若い者はすぐ一途に思い込むから……むづかしいかも知れないが、それに昔のことは話せないし——」「そんな弱気にならず意見して下さいよ、頼りに出来るのは貴方だけなんだから、今週の土曜日の午後、都合はどうですか？改めてお願いがありがたいの」房子の最後の言葉は哀願に変わっていた。

吉野は自信はなかったが、「土曜日の午後ですね、いいですよ。家内と一緒に待っています。皆さんで相談してやめさせるようにしましょう」「よろしく願いします」房子は吉野の承諾に受話機を置くとほっとした。

吉野なら人格者であり、警察OBで警察内部の粹も辛
いも知りつくしており豊富な体験を話してくればきつ
と健一の一途な気持をほごしてくれるだろうと思った。

三、情は人のためならず

それから数日後の土曜日の午後だった。房子は東武伊
勢崎線K駅の六番ホームで上り電車を待っていた。

ホームには七月中旬の強い日陽をさけた乗客は中央の
椅子のある方にかたまっていた。その中にいた房子が位
置を変えて、北側の階段の方に視線を移した時だった。

「あら栗田さん、栗田さんじゃありませんか？」と声を
かけられ目を向けると白いワンピースの五十代の女性が
連の男と五メートル離れた処に立っていた。

房子はめまぐるしく頭の中で声の主を思い出そうとし
たが思い出せないでいると、その女性は近づいて来て「
栗田さん、奥さんわたしですよ、上村朝子です。ほらず
っと前に助けて頂いた朝子ですよ」「ああ上村さんだっ
たねえ、すっかり変わってしまったてわからなくなっちゃっ
た、ごめんなさい」朝子は連れの夫に手短かに房子のこ
とを話してから「御無沙汰致しました。その節は大変お

世話様になりました。この人はわたしの主人の山本です」
夫を紹介した。

「わたし栗田房子です、よろしく」「私は朝子の夫の
山本明です。朝子が大変お世話になったそうで、ありが
とうございました」「いいえ、お世話だなんて——」房
子はひかえめに言った。

「奥さん、奥さんと御主人のお蔭で朝子はこんなに元
気になり幸をつかむことが出来ました。あの時貴方の御
主人に助けられなかったら今の幸は得られなかったん
です。奥さんや奥さんの御主人はわたしの命の恩人です」
朝子は目に涙を浮かべてそう言った。

房子は派手な服装、明るい笑顔を見た時、この人は今
幸だと感じとっていた。そして朝子の言葉を聞いて、よ
かったと嬉しさがこみあげて来るのだった。

それは遠い過去の日、亡き夫と二人で薄幸の女性を
救った。その親切が、今もこんなに感謝されようとは夢
にも思っていなかったし、また亡き夫がこの人に言った
励ましの言葉（人間は生きていればきつと幸が来ます。
希望を持って頑張って下さい）その言葉が真実となって
実現したからだった。

「よかったですねえ幸になって・・・それには朝ちゃんも頑張ったからよ。わたしも嬉しい」房子は言って朝子の顔に眼をやる。

朝子はハンカチで眼を拭くと「ほんとうに奥さんすみませんでした。時に御主人は今どちらの警察にお勤めですか?」「・・・主人ですか、それが・・・」房子は暫く間をおいてから「十四年前に亡くなったんです」小声で言って目を伏せた。

「ええ・・・亡くなった、またどうしてあんなに元気だったのに、どうして亡くなったんです・・・」朝子には信じられなかった。

整ったやゝ面長の若い栗田巡査、やさしい元氣な栗田巡査が死んだなんて、朝子は呆然としてそれから言葉が出なかった。でてくるのはとまらない涙・涙であった。

「朝子さん人生には苦しいこと、悲しいこと、辛いことが沢山あるんです。それに堪えその障害を乗り越えて行けば、必ず辛がめぐって来ます。辛くても辛抱して生きていれば必ず辛がきます。それを信じて強く生きるんです。日本は戦争に敗けたんです。戦争で多くの兵隊が戦死しました。また内地でも戦災で多くの人々が亡くな

りました。生きている人でも、爆撃で家を失った人は何十万人もいるんです。戦後は働手を失った疎開者が東京に帰れず農村に残っています。また勤め口もない人も大勢います。その人達は収入もなく寒さと飢にふるえながら生活しているのです。いく枚もない大事な衣類を食糧にかえて飢えをしのいでいるんです。

戦争に敗けたんですから仕方がないんです。その人達も明日あることを、春が来ることを信じて頑張っているんです。朝子さん、貴方は一人なんです、自暴・自棄にならず、自分自身を大切にして生きるんです。今からでも遅くないんです。生きることを考えて下さい」と自分を叱り励ましてくれた。その言葉だけでなく、結核療養所にいれてくれ、その療養費を全部出してくれ、奥さんと一緒に家族ぐるみで援助してくれたのだった。

お金のかかること、出すことは誰もが嫌った。人間落ち目になると冷たい目で見える人が多くなる。温い言葉をかける人でも経済の事まで援助してくれない、だがその誰もが出来ない事をやってくれたのが栗田夫妻だったのである。神様のような存在で有難いことであった。

その甲斐あって、自分にも生きる氣力が出て病氣を克

服することが出来たのだった。そして療養所を出て働いている時、同じ立派の犠牲となった今の夫、山本明と知り合い、山本の温い包容で幸福をつかむことが出来たのだった。

あの時、自分は栗田巡査に保護されていなかったら、間もなく死んでいただであらう・・・あんな立派な人がどうして早死にしまったのだろう。知らなかった。奥さん御無沙汰して、御恩返しもせずにすみませんでした」頭を深くたれた朝子の脳裏にはその時悲しい過去がよみがえってきた。

四、敗戦の嵐

終戦の翌年、昭和二十一年春になると海外に派遣されていた日本軍の将兵が続々と内地に復員してきた。その復員する人々を羨ましがっている人が居た。「今日も帰って来なかった」それは関口もと子と義弟の次郎だった。二人は夫と兄の復員を待ち侘^{まち}ていたのだった。そして帰らぬ人の面影を浮かべ今日も暮れゆく西の空を望みながら大きな吐息をするのだった。

その年は三月末には北支那（中国）にいる日本軍は衛

生兵を残し全員復員していた。また中支那（中国）の日本軍も六月には、ほぼ復員が完了した。これと併行して南方のジャワ・スマトラ・ビルマなどの日本軍も順調に内地に帰還していたのだった。

それらの地域から元気で帰員して家族と抱き合う姿を見て、二人は幾度も羨ましく思ったことであつたか。だが二人の願いも空しく関口清三は一向に帰ってこなかったのである。

やがて暑い夏が終り、稔りの秋がやって来たが関口清三は復員してこなかった。「姉さん、兄ちゃん^{あに}はほんとうに戦死してしまったんだろうか、そんなことはないよねえ」「ええ死なないわ、生きていますとも」きっぱり言つた。

次郎から兄ちゃんといわれたもと子の夫、清三は昭和十九年七月、ニューギニアの戦場で戦死と公報がはいっていた。その公報も戦死から三か月も経ってからである。そしてまだ遺骨も帰って来ないので二人はまだ死んだとは思えないのだった。

それに戦争で戦死したと公報があり、葬式まで出した者が元気で帰って来ていたので、二人は清三の戦死を益

々信じなくなり、生きていることを確信するのだった。

「ああ今日も帰って来なかった」二人は同じように嘆息した。そして嘆息が重っていく度に「もしや」という気になり確信が足元から崩れるのではないかと不安になってくるのだった。

「次郎さん休みましょうよ」と言うと、もと子は疲れた体を農道の端におろすのだった。

はるか五里の東北には筑波山が、沈みかけた夕日を浴びて紺色に輝いていた。もと子はじっと筑波山を眺めていた。

関東平野に突起している筑波山はいつ見ても美しいと思った。「国破れて山河ありか」それは誰かが口にした言葉だがもと子はそのとおりだと思った。

筑波山も村の東を南に流れる江戸川も戦前と一寸も変わっていない。だが村の生活も人心も大きく変わってしまったのである。その上戦争で出征した働き手の三割は戦死して帰って来なかった。

父を夫をまた、子を戦争で失った家庭は、残された家族は昔の豊かな暮らしはもどって来なかった。戦後は頼みの遺族扶助料も打ち切られ生活は困難になっていき、ま

た封建性は崩れ昭和二十一年には農地改革が行われ、地主は崩壊した。それに引きかえ小作人は地主から借りていた田畑は一反歩、四・五百円というただ同然の安値で手に入れ、地主との立場があべこべになっていた。

もと子の関口家も地主であった。その農地改革により七町歩所有していたうち四町歩の田畑が解放されてしまったのである。

戦争中、地主の青年清三と小作人の娘、もと子とは身分の相違という関係で、人目を忍んで恋をした。それは烈しい恋愛だった。

それをもと子の友人は「もと子は昭和の与謝野晶子ようだよ」と羨ましく言った。また周囲の反対を押し切って、漸く恋は実り結婚にゴールインしたが、その楽しい結婚生活も二年足らずの短い期間で中断されてしまったのである。

それは夫の出征だった。生れたばかりの男の子を残して出征した夫はそれきり帰ってこないのだった。音信すらない、もと子はあの烈しかった恋愛も夢のようだった。今はなんの為にどのように燃えた恋までして清三と一緒にあったのだろう、こんな結果になるなら平凡な

結婚の方が辛くなったかも知れないと思った。だが身分の相違は烈しくなければ結ばれないのだ、運命だと思つた、そう思うよりなかった。

農地を失い夫の居ない関口家の生活は味気なかった。

馬車馬のように働かねばならないので、農地改革で農地を手にした小作人の方が幸であろうと、思うことが度々あった。

夫さえ無事に帰って来たら、以前の幸がもどってくるのだ、だから夫の帰還に希望をかけていたのだった。

もしも夫が帰ってこなかったら、どうなってしまうだろう。子供もいることだし先行のこととも考えると夜も眠れないもと子だった。

敗戦後の国民は皆、ひもじかった。それは生地獄のような生活だった。金もなかった。衣食住が不足していた。衣食が高くて買えなかった。衣食はインフレで毎日あがり庶民には手が届かなくなる。その上収入の道である定職はなかった。働きたくてもその職場がなかったのである。

金がないので食料は手にはいらず、栄養失調で餓死する者もあった。失業者は町にも村にも溢れていた。何か

をやらなければ死んでしまう、生きるために都会の人は買出しになり農村にいる人は背負出しとなり闇の主食を農村から都会へ、電車や汽車で運びそのさや稼ぎで最低生活をしていたのである。

運配、が続く昭和二十一年当時の食糧事情を説明することはあながち無駄とは思えないのであえて説明する。

戦争が終った直後の昭和二十年十月、都市での主食の配給は一人、一日二合一勺（二九七グラム）で一食は茶碗一杯分であった。

しかも芋、豆類が代用品として配給されると、その分だけ米の配給から減らされたのである。このため米の配給は十日分しかなくあとの二十日分は代用品で配給されたのである。

昭和二十一年十月一日になるとちよっぴり主食の配給が増配されたがそれは四勺で空腹を満たすにはほど遠いものであった。

また配給が二合五勺になっても食糧は依然として不足しており運配が訪れてきたのだった。昭和二十二年七月二十日の調査では主食の運配は、全国で二十日、東京では二十五、八日、北海道では九十日となっていた。

計画どおり配給されても足りない食糧、運配はその分余計に闇米を買わなければならなくなり庶民の生活は苦しくなるばかりであった。

その年の十月十一日である。配給だけの生活を守った山口良忠判事は栄養失調で死亡した悲しい新聞記事がでたが、とにかく生きるためには配給以上の物を喰わなければならなかった。そのためにはどんな苦しい、辛いことにも堪えなければならなかった。

そのひとつの食糧を求める買出も辛い命がけの仕事だった。朝出て夕方帰る買出は一日がかりの重労働でもあった。買出に利用する電車も汽車もバスも満員だった。そのため汽車や電車は窓から降りしなければならなかったし、重い米を降すには並大底の労力が必要だったし、汽車には乗りきれずデッキにぶらさがっている者もいた。

またバスは砂利の少いでこぼこ道を埃にまみれゆれながら走るのだから、中に乗っている者は熱気と汗でバスに酔い、元気な者でさえ気持が悪くなるのだった。

乗客の半分以上は空腹だった。だから気持が悪くなってもなにくそと唇をかんで頑張ったのである。その買った

た食糧を家族の者が待っているのだから少し位気分が悪くても運ばなければ家族が喰ずにいなければならぬからである。列車地獄その頃買出列車をこのように呼んでいたのである。

インフレで物価はどんどんあがっていく、主食はその先頭を行った。また人々が容易に買える駅に近い農家は需要が多いので値をつりあげたり売りおしみをした。だから安く買うためには駅から遠い地方に行かなければならなかった。それは遠くなるほど体にこたえることになるのだがそんなことは言っていられなかった。一円でも安いところを見つけて行かねばならなかった。

もと子はこの買出の人々を見て大変だと思った。一日がかりの重労働だと思った。この人たちは朝早く電車で粕壁駅まで来てそこから一時間一本のバスに乗って四里八丁の道を西関宿まで行くのだった。

途中下車して歩いてもと子の村へ来る者も一日二十人位はいた。その者たちは村の農家から押麦やうどん、小麦粉を買って三十キロ以上の品物をリクサクにつめて帰って行くのだったが家に着くまではゆれる満員バスや通路がふさがれていて窓から降りなければならないし